



ミュンヘン大学語学研修の記録

2017/03/22

ミュンヘン大学語学研修を実施する意義

学生たちは、このミュンヘン大学語学研修から沢山の学びを得た。プログラムの事前学習で野口 薫先生より、事前にドイツ語の基礎を学ぶ、プログラムの中では、安全と危機管理を学んだ。本年は、世界的に不安定な状況がつづきヨーロッパへの難民受け入れなどがあり安全を確保する事にも力を注いだ。事前学習の中で、ホームステイ先であるミュンヘンの家族にプロフィールを送り出発前よりライフラインを繋いだ。このことにより、ミュンヘン到着後もスムースに家庭に入ることが出来た。また、ミュンヘン大学側の受け入れ態勢も日本センターの笠井先生ならびにVIVのマウ先生を中心に綿密な計画がなされていた。

これらの中に大正生は、プログラムを熟し乍ら、文化、芸術、観劇など一つ一つ体験と経験を繰り返し成長していった。研修に参加することで、広い視野と人間力を身に付けて行った。この研修において、学生たちは幅を広げていった。

もう一つ学生たちは学んできている。本年度は、東洋大学の学生と一緒に学ぶ機会を得た。同じ目的を持った学生が19名集まり、協力しながら学習を続けていった。更には、ホームステイを通して自分思いだけを通しては、何もうまくいかないことをまなび、家族という中で自分を見出すこと。その中で社会適応能力を高めることで自分を成長させることができること。時間を守り、約束事を守り、自主的に行動することをしっかりと学んでいった。このミュンヘン大学語学研修を通して学ぶことはたくさんあった。

内向化が進む大学の中で

日本の学生に「内向化」が進み、その結果「海外に出ない」「留学は面倒」「わざわざ苦労するのは」という学生が増加傾向にあることが報告されている。確かに、大正大学においても同様の動きや傾向がここ数年見受けられる。特に男子学生の内向化は顕著になっているように思われる。この主な原因は、他大学でも同じであろうが、大学生活の中で時間的な余裕と金銭的な余裕が持てない学生と言語での障壁が、その原因となっているように推察される。しかし、実際に、現地で見ること、聞くこと、触ることで本物を知ることになります。その結果として、このプログラムには、歴史、伝統、芸術、絵画、音楽が欧洲の香りがあり、参加する者の満足度は高くなっていると思う。

本校が実施している「ミュンヘン大学語学研修」では、LMUの学生と交流しながら学んでいくことを大事にしている。

この号の内容

語学研修を終えて	1
各学生レポート	2
研修資料	3
付録	4

重要な日付

02/12	羽田空港に集合でした
02/16	ノインシュバインシュタイン
03/06	思い出の写真（帰国）



はじめに

今回の研修で私が、充実した三週間を過ごすことができたのは、櫻井先生をはじめとする研修に携わって下さった方々、並びにともに研修に臨んでくださった田中先生、東洋大学の学生の皆さんのおかげであります。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

ドイツで学んだ異文化

三週間ドイツで生活して、今まで学習してきた中で疑問に思っていた「互いの文化を尊重しあうことが異文化交流については大切である。」ということについて、肌で理解し、また改めて考えさせられた。それは、私がホストマザーに肉じゃが、白米とみそ汁をふるまつた時のことである。料理が出来上がり、食べる準備をする際に「マザーは、きっと箸を使えないからスプーンとホーケーを用意しよう。」と気を利かせスプーンとホーケーのみを置いた。しかし、マザーは私がプレゼントした箸を使い「この持ち方は正しい?」と私に尋ねながら、箸を使って完食してくれたのである。この姿に感動しました、日本の文化を体験してもらえたことに対して嬉しさが込み上りてきた。この時私は、文化を尊重するということは相手の文化を体験するということではないかということに気が付いた。体験する側はもちろんのこと、体験してもらう側は、自分の国の文化に誇りを持つことができ、それに加え文化を再認識することができる。私もドイツでは皿を持ちながら食べることは行儀が悪いと気づいてからは、皿を持たずに食べるようにならした。このように、お互いの文化を尊重するためににはお互いの文化を体験することから始めるべきではないだろうか。

白バラ運動

ナチスへの抵抗運動として、ミュンヘン大学の講堂でバラをまいたとして有名な白バラ運動。この白バラの主要メンバーであったショル兄妹について私は、高校生のころから興味を持っていた。そして今回ミュンヘン大学に訪れる事ができ、実際の現場となった講堂に訪れ改めて白バラのメンバーたちがとった良心に基づく行動に心を動かされた。そして、偶然にも二月二十二日はショル兄妹と友人のクリストフの命日であった。この日には、大学の講堂でコンサートミュンヘン大学の学生による白バラを題材とした演劇が上演された。コンサートに集まった人々はみな白バラに思いをはせているのだと思うと、胸が熱くなった。最近の教育現場では、ナチス時代に

起こった事実をありのままこども達に伝える授業を行っている。自分たちの犯した過ちからいつまでも目をそらさず、見つめ続けようとするドイツ人の歴史認識に対する姿勢や考え方を日本人も見習うべきではないか。政府の都合で歴史の教科書を制作するべきではない。温故知新という言葉があるように正しい歴史をこども達に教えることで、新しい未来が生まれていくのではないか

ノイシュバンシュタイン城

ノイシュバンシュタイン城には、第一週目の週末に訪れた。冬場ということもあり足場が若干悪くなっていたものの晴天に恵まれ、世界各国から多くの観光客が訪れていた。ルートヴィッヒ2世が心酔していた作曲家ワーグナーの作品をもとに建てられた夢の城である。室内に一步踏み入れた途端中世にタイムスリップしたかのような内装や豪奢な装飾品に度肝を抜かれてしまった。装飾品の大多数は、当時最新とされていた19世紀のデザインのものではなく、王の理想とする世界観に沿ってあえて18世紀のデザインが使用されている。また、天井に描かれた神の絵画はルートヴィッヒが理想とする神と自分自身の姿を重ね合わせ精神を保っていたとされている。このようにルートヴィッヒは、王としての不安を豪華な室内と絵画に頼らなければならないほどに追い込まれていたのではないかということが推測できる。ドイツと日本の建築物を比較してドイツの建築物は、外見に細かい装飾を施してあるものが多い。それは、日本とは異なり地震の心配がないためである。私たち日本人がドイツの建築物に感動できるのは、外見の美しさだけではなくドイツでしか見ることができない風景だからではないだろうか。

終わりに

今回の研修では、たくさんのものを吸収できただけではなく長期留学への方向性を見出しができた。長期留学には前々から挑戦したいと考えていたものの、具体的に何をドイツで学びそれをどのように将来に生かしていくのかは曖昧だった。しかし、三週間過ごす中で、ミュンヘン大学の日本語科の教授であり留学を担当する笠井先生とお話しする機会があった。そのお話を受けて、ドイツの進んだ難民支援対策の文献をドイツ語で読み難民支援について学びたいと感じた。それと共に、去年から一年間貴学で学ぶ中でこどもの「食育」にも興味を持ったので、将来的には難民のこどもたちの食育支援に携わりたいと三週間過ごす中で発見することができた。今後の学校生活の中で、今回浮き彫りとなつた自分の課題を消化し、来年さらにより多くそして具体的な学びをミュンヘン大学で行うことができるよう過ごしていきたい。



私は今回、約三週間に及ぶ語学研修に参加してさまざまな経験を得た。ここではドイツとオーストリアの研修と観光について報告する。

1. 観光

まず私たちが最初に訪れたのはマリエンプラツェだった。ラードハウスにはある時間になると鐘の音で曲が流れ始め、中心部の人形が動き出すというものだった。その人形は結婚式の様子やビール職人のダンスなど、ミュンヘンの歴史を物語るような仕掛けであった。この町の周辺は賑わっており、ショッピングモールや店が並ぶ場所であった。

ミュンヘンには多くの教会があった。その中で私が最も感動した教会が“フラウエン教会”である。

写真のとおり、教会の内装はかなり豪華で、ひとつひとつ彫刻がとても美しかった。ここで知ったことは、カトリックは豪華な建造物、プロテスタントはシンプルな建造物であることがわかった。マリエンプラツェの町は美しい外観を残すため、建造物に既定の高さがあることがわかった。

ドイツだけでなく私たちは、オーストリアのウィーンとザルツブルクにも観光に向かった。

ウィーンは“音楽の都”と言われているので、音楽が鳴り響いているイメージが強かった。音楽がじょっちゅう鳴り響いているわけではなかった。しかし、教会や美術館など多く、いたるところにカフェがある美しい町並みだった。中心部の治安は良いが、少し外れると怖い印象のあるところだった。ザルツブルクもまた美しい町並みで、童話に出てくるような街並みであった。遊び心があふれる場所でもあり、町のところどころにおもしろいモニュメントがあった。

2. 食べ物

ドイツの名物といえばヴルストやビール、などのイメージがあったが、その他にもたくさんの名物があった。ジャガイモが餅のようになった“クヌーデル”、日本のとんかつに似ている”シュニッツェル”など名物があり、どれもおいしかった。

しかし、ドイツの料理は全体的に味が濃く、いつものどが渴いていることが多かった。ドイツ人がいつも20近くの水を持ち運ぶ理由がわかった気がする。

ドイツにも日本のすしが売られており、食べてみた。基本的に知られているのはサーモンとカリフォルニアロールであり、スーパーでパックに入れて売っていた。味は良いが、シャリがギチギチに固められていた。

ドイツやオーストリアはケーキ（クーヘン）やチョコ（ショコラーデ）がおいしく、どこの店で買っても、どのカフェで食べてもおいしかった。特にカフェザッハで食べたザッハトルテはとても美味しかった。

3. 文化の違い

ドイツに滞在して、日本とのさまざまな文化の違いに大変驚いた。まず驚いたことは、電車や店内に犬を連れ込むことはあたり前だということである。日本では“車内で暴れてしまう可能性がある”や“店内に連れ込むと不快だ”など絶対に認められない行為であるが、ドイツでは犬のしつけがしっかりとされており、盲導犬並みに教育されているためおとなしいのである。大変ドイツらしい感じた。次にチップを払うという文化だ。カフェやレストランに行った際は必ず、感謝の気持ちを表すために払うという行為に驚いた。また、夜の10時以降はドライバーなどの大きい音を出してはいけないこと、8時以降にはほとんどの店が閉まること、“YES”と“NO”がはっきりしている性格であることなどたくさんあった。

4. 授業風景

ミュンヘン大学では、マウ先生やジェニー先生、ナディーン先生のもとで行われた。簡単な挨拶から文法の説明、またチュータープログラムで訪れる場所についての紹介など盛りだくさんの授業であった。退屈することのない楽しい授業で、終始笑って受けていた気がする。この授業を通して、ホストファミリーとのコミュニケーションがスムーズに行えるようになった。そして、こちらが伝えたいことをつたないドイツ語ではあったが、伝えられたことが一番嬉しかった。

5. 歴史

ドイツやオーストリアの歴史はチュータープログラムを通して学ぶことが出来た。中でも最も衝撃的だったのは“ダッハウ収容所”的見学である。当時の独裁国家について、戦争がどれほど恐ろしく残酷なものであるかを物語っている場所であり、収容されていた人々の写真や映像が展示されていた。その展示内容から、収容所に収監されていた人々のほとんどが骨と皮といえるまでの状態に痩せ、過酷な労働を虐げられていたことを物語っていた。見学を通して、過去の残酷な出来事や行いには目を背けずに、きちんと向き合っていくことが大切だと学んだ。

6.まとめ

今回の研修を通してたくさん学んだことがあった。初日は、海外の人とコミュニケーションを取るには言葉の壁があり困難ではあったが、それでも少しずつ覚えていく単語や文法で会話していくことはとても楽しかった。また、ドイツの文化を実際に肌で感じることにより海外を身近に感じることが出来た。言葉の壁さえ無くせば、たくさんの人々の価値観や思いを共有することが出来るのではないかだろうか。



1.はじめに

ミュンヘン大学語学研修は私の最初の海外渡航であり、私自身が外国人となった。ミュンヘンはドイツのバイエルン州に位置する歴史ある都市だ。ミュンヘンには多くの伝統・文化・芸術が存在する。そこで様々な経験は新鮮な驚きに満ち溢れており、今まで曖昧にしか理解していなかつた異国の文化を肌で感じ、知ることができた。今回の留学で得た知識を、分野ごとに分け、以下に述べようと思う。

2.生活とルール

2-a ホストファミリーとの生活

まずは最も身近な生活面から述べようと思う。私は両親と子供4人の6人家族の家に3週間ホームステイをした。私もひとりのドイツ人として生活に馴染めるよう様々なことに気を配ったが、一番驚いたことは彼らがとても綺麗好きなのに食器は食洗器であらうだけで、手で洗わないということだ。これにはいくつかの理由が考えられる。まずひとつはドイツでは水が貴重だということ。またかれらは食事の際ナイフとフォークを使い綺麗に食べるため食器があまり汚れないのだ。さらに、彼らは時間というものにこだわりを持っているのか、家族との団らんや重要なこと以外はなるべく短時間で済まそうとするため、なにごとも効率的にしようとする傾向がある。そこで食洗器の出番というわけだが、日本人の自分としては皿のわざかな汚れが非常に気になってしまふ。異国の感性を感じた瞬間であった。

そしてホストファミリーとの生活で一番私を困らせたのはシャワーの浴び方と洗濯の習慣である。彼らは基本朝にシャワーを浴びるのだが、それが実に不規則なのである。まず彼らは2日から3日に一度、朝にシャワーを浴びるのが基本だ。しかし、重要なことが控えている日の朝もシャワーを浴びるし、汚れて帰ってきた場合は夜にもシャワーを浴びる。ホストファミリーは皆起きるのがあまり早くないので、シャワーを浴びたい日が皆かぶってしまうと、朝の短い時間にシャワーの争奪戦が始まる。おかげでいつ浴びればいいのか初めはわかりにくいし、効率的に体を洗わないと後がつかえてしまう。大家族の場合とくにである。しかし、水が少なく、夜を静かに過ごすドイツの人たちにとっては当たり前のことなのだ。

これまで述べてきたことは、日本人からすればこころよく感じないことかもしれない。しかし、国が違うということは生活環境も違うということなのだ。当然ながら彼らの生活において素晴らしいと感じる点は多々あった。



ドイツ人は部屋の戸を開めないということは知っていたが、正確には違うのだ。彼らは扉を効率的に使っていることに私は気づいた。戸を開けておくことにより、すぐに意思の伝達が行えるため、家族の距離がちかくなる。すべての部屋の空気を同時に管理できるため部屋ごとの温度差が少なく、快適にすごくことができる。これにより戸を開めておくということは「今は入らないでください」という意味になるし、戸を少しだけ閉めることによって中から外を確認するために開けているのだと分かる。戸が家族のコミュニケーションの一部を担っているのだ。

対して現在の日本では戸はあまり意識されていないかもしれない。しかし昔の時代、戸は人との距離を明確に表していたし、女性は戸の内にいることが多かった。なるべく光が入るように障子などの技術も産まれ、様々な形態の戸が作られた。この文化は日本にも必要ではないだろうか。

私のホストファミリーの住む住居は日本に比べるととても大きい。ドイツのたいていの家には地下や倉庫があるらしいが、入ってみると大量の衣類や飲料・食料でいっぱいになっていた。ドイツ人が部屋を綺麗にできるのは地下に物を押し込んでいるからなのかもしれないと思った。

さて、以上はホストファミリーとの生活において体験したことであるため、ドイツ全員がそうだと断言できることではないが、これからは家の外で体験した「ドイツ社会」での常識とルールを述べようと思う。

2-b ドイツでの一般的な常識とルール

ドイツでは、目的地までの移動に電車かバスを使うことが多かった。内装は日本と大して変わらないが、吊り革がない。バスは日本のものに比べてとても大きく、3台ほどが繋がっていてすべてバリアフリーになっていた。おかげでとても乗りやすいが、日本との違いが随所に見られ、慣れるまでが大変であった。

まず、ドイツの電車には改札がない。そのため無賃乗車も普通にできる。しかもしも見つかれば罰金60EUROが課される。切符は自動販売機で買うのだが、日本と違いゾーン制でその範囲内であればいくらでも乗り降りできるという素晴らしい制度となっているのだ。これはぜひ日本もそうなってほしいと感じた部分で、移動がとても楽であった。定期券を買えばさらに安く済ますことができるので、とても財布に優しい。そのかわり定時通りに来ることは少なく、電車やバスの遅れは日常茶飯事である。

電車やバスは、その利便性の高さゆえ乗客の数が多く、様々な人種がひしめき合うため常に自分の鞄を気にしているなければならない。慣れるまでは少々疲れてしまう。当然小さい子供も乗るわけなのだが、赤ちゃんや小さい子供と乗り合わせた際の周りの対応には目を見張るものがあった。日本であれば赤ちゃんが泣けば周りが注意することも





あり、母親が謝るという場面をよく見かけたがドイツでは一切見なかつた。逆に子供を育てる母親には敬意のようなものをもつており、老若男女とはず、皆が積極的にその母子を安全に移動させようとするのだ。これに私はとても感動した。高齢化社会がすすむ日本も当然ながらこうあるべきではないだろうか。また、子供が騒いでいると日本人は迷惑がるものだがドイツではそんな態度は示さない。そして若者は当然のように皆立っている。ドイツ人は頑固で席を譲らないなどという話を聞いていたものだからこれには驚いた。譲る必要がないのである。

次に道路での話に移る。日本の大阪がそうであるが、エスカレーターなどは急がない人は右側に立つ。これは慣れればすぐなのだが、信号の切り替わりの速さは信じられないほどだった。5秒ほどで点滅もなくすぐ赤になってしまうためとても渡りきれない。盲目の人はどうのように渡っているのだろうかと心配になるほどであった。車も路面電車も歩行者をあまり気にせず走ってくるので恐ろしいかぎりだ。しかし良い点もある。それは自転車専用道路があり、ドイツに住む人は皆それを理解しているのでそこには基本立たないということが常識化しているということだ。日本では自転車は基本邪魔者扱いで専用道路も少ないためとても走りにくい。ドイツのすべての道路に必ずあるわけではないが、とてもうらやましいと感じだ。

3.芸術と伝統

3-a 絵画・彫刻・近代アート

ミュンヘンにはドイツを代表するような美術館・博物館が多く存在する。そのなかで今回私が訪れたのは3つのピナコテーク(Pinakothek)とレンバッハハウス(Lenbachhaus)である。

ミュンヘンにはAlte Pinakothek・Neue Pinakothek・Pinakothek der Moderneの3つのピナコテークがある。ピナコテークとは「絵画の収蔵所」という意味であり、3館はそれぞれ別の時代の芸術が展示されている。

Alte Pinakothekは世界でも最古の部類に属する公共美術館である。中世からバロック期にかけての作品を中心に陳列しており、アルテ(Alte:古い)の名前通り3館でもっとも古い時代の絵画が圧倒的な存在感をもって私達を魅了してくれる。巨大な絵画は完璧な管理のもとに、私たちが最も見やすい環境のなかで並べられている。

アルテが建てられて数十年後、バイエルン国王ルートヴィヒ1世が当時の絵画を収蔵するためNeue Pinakothekを建てた。アルテに対してノイエ(Neue:新しい)という名前が付けられ、18世紀半ばから20世紀の作品が収集されている。

二つのピナコテークが絵画を中心に展示しているのに対し、Pinakothek der Moderneは20世紀から21世紀の現代美術・グラフィックアート・建築・デザインを展示する美術館であり、一風変わった内容となっている。近現代美術の展示館としては、ヨーロッパ最大規模を誇る。



そして3つのピナコテークの近くにレンバッハハウスが建っている。美しい庭があり、当時のまま残された二階の邸宅は豪華絢爛というほかない。大きさはピナコテークと比べるとそれほどでもないが、19世紀の薫りが私たちを包み時間を忘れさせてくれる。

以上の4館すべてで係員に共通して言わされたことは、絵画まで1mの距離以内には入るなということだ。日本の東京にある西洋美術館でも同様のことを注意されたが、それよりもかなり強く促され尚且つチェックの目が厳しい。監視している職員の数も多く、とても厳重に管理されているようだ。そのかわり1m以内に入りさえしなければ完璧な鑑賞を約束してくれる。芸術に対する姿勢は日本よりも厳格で実直である。

私が訪れたのは日曜だったためすべてのピナコテークをそれぞれ1EUROで鑑賞することができた。これはとても素晴らしいことで、絵画に触れる機会が人の感性を育てくれるのだと感じた。私のガストファミリーもそうだったがドイツ人にとって芸術は身近な存在のようだ。

3-b 音楽

ときどき、ミュンヘンの街中では美しい音が聞こえることがある。有名な市庁舎のあるMarienplatz(マリエンplatz)では毎日のように楽器を演奏する人や歌う人、ダンスをしている人がいてとても賑やかだ。ちかくにはオペラ座があり、皆で見に行ったロミオとジュリエットのバレエは素晴らしい、最高の夜を過ごさせてくれた。

また、ミュンヘンにはミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団がいて、コンサートを開いている。私は著名なバレンボイムのシューベントピアノソナタを聞くため訪れたが、まずホール入り口のロビーからすでに別世界であつた。スーツを見事に着こなす大人の人達に囲まれ、まるで映画の世界にでも入ったかのような優雅な雰囲気であつた。皆芸術を、音楽を愛する者達だ。私が困っていたときは笑顔で助けてくださり、席を通るときは皆意思疎通でもしているかのようにそれぞれが素晴らしい一夜のために最善の行動をしてくれる。おそらく愛するものを大切にする気持ちは万国共通なのだろうと感じた。

ミュンヘン大学で開催されたオルガンコンサートでも同様であった。たとえ学生のコンサートであったとしてもそこにいるすべての人達は真剣にひとつの世界に没入するため、少しの音にも気を配り、音を立てないよう注意をしていた。芸術に対する真剣さを肌で感じた瞬間だった。同時にその居心地の良さは芸術に対する関心を高め、皆に伝染していくのだろう。それが子供にも伝わり、きっと未来へと続いている。これが伝統や文化になると私は考えた。



3-c 建築

芸術とは絵画や音楽だけではない。ドイツには美しい修道院や教会、建造物が多く点在している。キリスト教独特の天を目指す形として先が尖っているのは共通しているが、模様はそれぞれで異なり、また装飾も華美なものから素朴なものまでとさまざまである。共通して言えることは宗教が関わっているということと何かしらの意味があつて建てられているという点である。

街並みにしてもそうだ。どの家も基本色を共通にして街の雰囲気を壊さないようにしている。条例で高さを制限することで見晴らしも綺麗だ。日本の観光地で同様のことが行われていたりするが、町全体が統一されているさまはとても美しく、町そのものが芸術といえる。

私が訪れたフュッセンはロマンチック街道の終点であり、かわいらしくも美しい町だ。街の近くには有名なノイシュヴァンシュタイン城が建っている。ルートヴィヒ2世がロマンチックな世界を作ろうと建てられたその城は周りの景色も相まってまるでファンタジーの世界へ迷い込んだかのような景色を見せてくれる。

4.法律

ドイツは州ごとに法律が違う。正確には州ごとに法律を作ることができ、その上にまた憲法がある形となっている。日常の生活にかかわってくる法律で、日本にはない条文がたくさんある。

たとえば日曜祝日は営業禁止であり、実際私たちが行ったときはほとんどが営業しておらず、夕食は自宅で食べなければいけなかった。また、たとえ営業していたとしても4時には閉店してしまう。

犬が基本的にどこにでも入れるというところも日本とは違う。犬を連れてバスに乗る人もいれば、放し飼いをしながら街を歩く人もいる。そしてドイツにはペットショップがない。つまり訓練された犬しか飼ってはいけないし、税金もかかる。

以上が特に生活面で強く感じた法律であるが、交通の右側優先や飲酒可能な年齢が16歳というのも日本と違う点だ。

5.オーストリア

今回の留学で私は二度オーストリアを訪れている。一度目がウィーン。二度目がザルツブルクである。

ウィーンは音楽の都であるとよく紹介されていたので、私は町中に音があふれているものだと期待していた。しかし現実には乞食ばかり目にする街で治安もよくなく、伝統的な建物は町の中心地にしかなかった。しかし有名なカフェがたくさんあり、価格は高いがどれも日本では味わったことがないような美味しいものばかりであった。



ウィーンで私が一番驚いたのは王宮のスケールとその豪華さである。まさに王様が住むにふさわしいと言わざるを得ない圧倒的大きさはとても一日では回りきれないほどである。日本の天皇陵も広大な土地を所有しているがそれに比肩しうるほどである。王宮は博物館として開放され、宝石なども展示されている。すべてを見ると見料は高くつくが、実際に使われていた立派な服や宝石、楽器や武器に囲まれていると、文献から得た知識だけの空想から当時の生々しい現実に変えてくれる知識と力を与えてくれる。

昼間、音楽に触れられずに失望していた私達に芸術という活力を与えてくれたのは、二日目の夜に見たミュージカルだ。当然ドイツ語をはなすため、すぐに理解するのは難しい。しかし、英語の字幕を映してくれるし、なにより表情や舞台装置で私たちにストーリーや感情を訴えかけてくる。おかげでとても楽しい一夜となった。

ザルツブルクはモーツアルトの生まれた町として有名な場所だ。そのためか、まちのいたるところで楽器を演奏している人がいる。同時に乞食もたくさんいるが、マフィアと繋がりがある下っ端という話だ。街並みとしては、建てられてから500年以上の年月が経過している建物がいくつもあり、当時のまま残されている。お店の看板をそれぞれのお店が独自に作って壁に掛けるという伝統は今でも守られており、その独特的な雰囲気はまさに昔のままのかもしれない。小さい町だが狭い場所にいくつものお店と人が楽しく暮らしているにぎやかな街である。

6.まとめ

ミュンヘン大学語学研修では、ホストファミリーとの生活を通じて、ドイツの生活を感じることができた。大学に通うことによって一般的な社会生活を体験することができ、ドイツで生活する人たちの常識を理解することに繋がった。同時に異国で暮らすことの大変さも味わうことができた。

美術家や博物館を巡ったことで、ドイツ人の芸術への興味・関心を肌で感じたし、自身の芸術性を育ててくれたと同時に西洋の芸術を理解する助けになった。

州首相や裁判所に行ったことでドイツの法律をより直感的なイメージとして受け取ることができ、生活で感じたこととも繋がっていった。

さらに、先生に頼らず生徒だけで異国の地を訪れたことは、行動力と自信を与えてくれたが、同時に自身の不甲斐なさを実感させられることとなった。日本がいかに安全かを強烈に思い知らされた。



7.おわりに

今回の留学は日本にいただけでは分からなかつたこと、想像するしかなかつたことに実感をくれた。それは今までの自分の浅はかさを気付かせてくれると同時に私の心を成長させてくれたが、異国之地を訪れたことは今の時代特別ではないといつてよい。大事なのはそこで何を学び、どのようにそれを生かす行動をとるかということである。

今回私は外国人としての気持ちを味わったわけだが、以前の外国人というイメージは崩れ去り、当たり前の話かもしれないが、同じ人間なのだと真に理解できた。もし、この感覚を日本人全員で共有できたなら、少子高齢化を食い止めるためにもミュンヘンのような外国人に寛容な街づくりが日本でもできるかもしれないと私は感じた。



成果は数字で測れない

報告書の中に、学生たちが強く感じ取っている「世界の中の日本」についてこう述べている。

「グローバル化が進み、日本にいながら世界と繋がることが容易になった今だからこそ、外国に行く必要がなくなったのではなく、むしろ実際にやってみて自らの目で見たことを、自分自身で考えることがとても重要になってくるのではないかと思う。井の中の蛙になってはもったいない。」「日本の歴史からも分かる。島国だから、ということを言い訳に、なかなか世界と触れ合おうと行動してこなかった自分が、結局はすごく日本人らしいと思った。日本のこと好きであり、日本人らしい自分も好きだが、今回の経験を通して、もっと日本を知るべきだと感じ、さらに考えるだけでなく行動し世界に触れたいと思った。」彼らの言葉すべてを語っているように思われる。外向的になれば「内向化」になりつつある大学生たちが多い中で、このような気持ちを少しでもファシリテートできたなら、私達、国際教育を担当する者としては、今後の学生に示すべき操舵は自ずと預けられたのではないかと思う。

今後とも、きっかけを作ること、学生自らに気づきと発見を大切にプログラムの推進に邁進したいと考えている。

。

ミュンヘン大学語学研修 2017

住所 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学

教務部教育支援課

国際

電話番号: 03-5394-3039

FAX 番号: 03-3918-9179

電子メール: kokusai@mail.tais.ac.jp

